

炭鉱の経験はいかに記憶されてきたか

—ある詩人の作品と半生から—

東日本国際大学 坂田勝彦

問題意識

本報告は、元炭鉱労働者で、閉山後、自らの経験を様々な形で表現してきたある詩人の半生をもとに、炭鉱という場所での経験がそこで働いた人々のその後の人生でいかに記憶されてきたかを検討する。

近年、炭鉱で労働者たちが営んできた様々な活動に関心が集まっている。とりわけ、1950年代から60年代にかけて各地の炭鉱で行われた文化活動は、彼らが直面した過酷な労働環境やエネルギー革命に対する怒りを表現する実践であると同時に、様々な立場や境遇を越えて人々を連帯させていく可能性を有していた（水溜 2013 ほか）。

近年、グローバリズムと新自由主義が世界中を席卷し、社会の亀裂や分断があらゆるところで深刻化するなか、前世紀に様々な形で模索された運動や実践への関心が高まっている。炭鉱労働者たちが行ってきた多様な文化活動は、社会や資本と対峙し、連帯を模索していく際、示唆に満ちたものであるのではないだろうか。

報告の内容

以上の問題意識から本報告は、元炭鉱労働者で、閉山後、自らの経験を様々な形で綴ってきた詩人である山口賢氏の半生に注目する。同氏は、大手炭鉱のひとつであった杵島炭鉱（佐賀県杵島郡大町町）で働き、同炭鉱の労働組合運動に深く携わった。そして、当時から仲間とともにサークル誌を発行し、その後も多くの作品を書き残してきた。

同氏の創作活動の原点の一つが、炭鉱時代の経験である。労使紛争において、闘争に向けたパトスを表現する手段として、彼は戦闘的かつ情熱的な詩を綴った。また閉山後は、時代と社会への怒りを表現する手段として多くの詩を綴っており、そこで題材とされたのが炭鉱時代の記憶であった。

彼はそうした自らの創作活動について後に、その核心には「時代の記録者」としての責務を自らに課していたと振り返っている。社会全体が高度経済成長の下で変わりゆくなか、無数に生成する矛盾に抗し、時代の姿を告発する手段として創作活動があったこと、そして、そこでは幾度となく炭鉱時代の経験が参照されていく。「私の詩は、私自身の人生であり分身です」。そう語る同氏にとって、炭鉱時代の経験は彼の人生において、重要な記憶としてあり続けていたことが窺われる。

多様な闘争と連帯を生み出してきた炭鉱というトポスの有様と、そこでの経験が当事者のその後の人生でいかに生きられてきたか。「詩は自らをうたうと同時に、他者をうたうもの」であり、他者と「感動を伝えあい、わかちあう」ものであると表現した同氏の著作物を手掛かりに、本報告は、炭鉱の経験がそこで働き暮らした人々のその後の人生でいかに記憶されてきたかを明らかにする。

参考文献 水溜真由美 2013 『「サークル村」と森崎和江—交流と連帯のビジョン』ナカニシヤ出版
「詩を語る会」事務局 2011 『詩を語る会 話の記録 第一集』